

Title	「レシ」の語りにおける喪失と回復の表現技法について
Sub Title	Loss and resilience in narratives
Author	國枝, 孝弘(Kunieda, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学
Publication year	2020
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2018.)
JaLC DOI	
Abstract	<p>本研究ではレシという言説形式をまず、小説と物語の構造化の差異という点でとらえた。物語が小説と異なる点は書くことに終わりが打てないことだ。小説はどこかで終わりをむかえる。小説はどれほど最小限であったとしても構造化という作業から免れることはできない。そうでなければ書かれたものは、断片の羅列にすぎなく、そこに作品というまとまりは生まれることはない。レシの場合に、語りに終わりが無いのは、語ったことで人生が終わらず、語りが続いていく可能性を持っているからである。小説は結末を構造として備えている。だが、私たちの書く物語には終わりが無い。物語とは世界への私たちのまなざしであり、私たちの内面への反省の表現である以上、世界と私の関係の変容によって常に紡ぎ続けられるものだからだ。端的に言えば物語とは私たちの人生のことである (= 物語的自己同一性)。人生の物語は時間の推移とともに新たに編み直され、意味を変容させながら続いていく。小説がどれほど実人生に基づいて作られていようと、そこには「仮構」があり、その構造の中では時間は無時間構造となる。</p> <p>さらに「物語は出来事をただ語りによって再現してみせることによって、その出来事をあれこれの説明から解き放ってやる。出来事の連関が歴史学や長編小説のように必然性をもって提示されることがないために、事柄を解釈する大幅な自由が聴き手に与えられることにある。」すなわち、この意味では小説は「筋書き」があり、その自然な展開に私たちは引き込まれる。対して、物語にそのような必然性は不要である。だからこそそこに解釈の自由が生まれてくる。構造がないからといって、記録や日記とは異なる。記録や日記の断片に対して、その書かれてあることにあらためて意味づけをすることが物語 = レシである。</p> <p>In this study, we took up the discourse form of «récit» in terms of the difference in the structuring of the novel and the narrative. What makes the story different from the novel is that it never ends in writing. No matter how small a novel can be, it can not escape the work of structuring.</p> <p>In the case of «récit», the reason why the narrative is never ending is that life does not end with what we talked about and there is a possibility that narrative will continue. The novel has the ending as a structure. But the story we have written is endless. The story of life is redesigned with the passage of time, and continues as it changes meaning.</p>
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2018000005-20180065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究代表者	所属	総合政策学部	職名	教授	補助額	100 (C) 千円
	氏名	國枝 孝弘	氏名 (英語)	KUNIEDA Takahiro		
研究課題 (日本語)						
「レシ」の語りにおける喪失と回復の表現技法について						
研究課題 (英訳)						
Loss and resilience in narratives						
1. 研究成果実績の概要						
<p>本研究ではレシという言葉形式をまず、小説と物語の構造化の差異という点でとらえた。物語が小説と異なる点は書くことに終わりが打てないことだ。小説はどこかで終わりをむかえる。小説はどれほど最小限であったとしても構造化という作業から免れることはできない。そうでなければ書かれたものは、断片の羅列にすぎなく、そこに作品というまとまりは生まれることはない。</p> <p>レシの場合に、語りに終わりが無いのは、語ったことで人生が終わらず、語りが続いていく可能性を持っているからである。小説は結末を構造として備えている。だが、私たちの書く物語には終わりが無い。物語とは世界への私たちのまなざしであり、私たちの内面への反省の表現である以上、世界と私の関係の変容によって常に紡ぎ続けられるものだからだ。端的にいえば物語とは私たちの人生のことである(=物語的自己同一性)。人生の物語は時間の推移とともに新たに編み直され、意味を変容させながら続いていく。小説がどれほど実人生に基づいて作られていようとも、そこには「仮構」があり、その構造の中では時間は無時間構造となる。</p> <p>さらに「物語は出来事をただ語りによって再現してみせることによって、その出来事をあれこれの説明から解き放つてやる。出来事の連関が歴史学や長編小説のように必然性をもって提示されることがないために、事柄を解釈する大幅な自由が聴き手に与えられることにある。」すなわち、この意味では小説は「筋書き」があり、その自然な展開に私たちは引き込まれる。対して、物語にそのような必然性は不要である。だからこそそこに解釈の自由が生まれてくる。</p> <p>構造がないからといって、記録や日記とは異なる。記録や日記の断片に対して、その書かれてあることにあらためて意味づけをすることが物語＝レシである。</p>						
2. 研究成果実績の概要 (英訳)						
<p>In this study, we took up the discourse form of «récit» in terms of the difference in the structuring of the novel and the narrative. What makes the story different from the novel is that it never ends in writing. No matter how small a novel can be, it can not escape the work of structuring.</p> <p>In the case of «récit», the reason why the narrative is never ending is that life does not end with what we talked about and there is a possibility that narrative will continue. The novel has the ending as a structure. But the story we have written is endless. The story of life is redesigned with the passage of time, and continues as it changes meaning.</p>						
3. 本研究課題に関する発表						
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)			
國枝孝弘	高畑勲のジャック・プレヴェール翻訳『ことばたち』	ユリイカ	2018年7月			